

## ゆかたの着装体験を組み込んだ総合的な学習の時間の授業分析

扇澤美千子	茨城キリスト教大学生生活科学部
川端博子	埼玉大学教育学部家政教育講座
加藤順子	埼玉大学教育学部附属中学校
薩本弥生	横浜国立大学教育人間科学部
斉藤秀子	山梨県立大学人間福祉学部

キーワード: ゆかたの着装、総合的な学習の時間、外部講師、日本文化

### 1. はじめに

現代は、技術の進歩や国際化・情報化の進展によってわたしたちの価値観も変化し、長い歴史の中で培われてきた生活技術の伝承の機会が減り、古きよきものや自国の伝統文化への関心は低くなっている。このような背景のもと、2006年に教育基本法が改正され、前文には「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」ことが明記された<sup>1)</sup>。そのことを受けて、音楽科における和楽器、体育科における武道、国語科における伝統的な言語文化など日本文化を理解する教育が各教科の題材として取り上げられるようになってきている<sup>2)</sup>。

われわれ研究チームでは、日本の「きもの」文化を次世代に伝承する家庭科の教育プログラムを開発することを目的として、中学校・高等学校の生徒を対象に、ゆかたの着装方法を学び、「きもの」文化に対する理解を深める体験型の授業を12校で行い、実践報告にまとめた<sup>3)</sup>。これらの実践により、和服は、日常的に着られなくなってきたため今の生活に生かす点からのアプローチが難しく、授業実施においては指導者側の準備（例えば和服の知識、着付け技能面の習得、和服や帯の準備）や指導法（説明・着装・評価まで授業をどう運営するか）など課題も多く、家庭科の少ない時間の中で和服の着装に時間を割くのが難しいことも大きな壁となっていることが明らかとなっている。

また、これまでの実践報告から生徒たちが着装実習を楽しみ、きもの良さに気づいていくことも明らかになっており、さまざまな学習の機会に和服の着装を体感できないか、もっと手軽にできる授業構成はないかさらに検討する必要があると考えた。今回、総合的な学習の時間へ組み込むことでより多くの学校で導入できる授業実践を目指して、ゆかたを長く身につけてその良さを感じることでできる題材設定、着装指導においては、着付けをスムーズに行う対策として外部講師の協力、教材準備として業者によるゆかたの準備について検討した。

外部講師の位置づけについて国際理解教育実践事例集<sup>4)</sup>では、教師の決めた指導案に沿って内容を部分的に担う「補完型」、授業を依頼する「委託型」、教師と外部講師が双方の要望を組み込みながら授業をつくる「協働型」に分類している。外部講師を導入した授業としては、外人講師

を招く英会話、専門的なテーマでの授業を実施する理科等での実践報告<sup>5)</sup>、が良く知られているが、「和服の着装」を扱ったものとしてはNPO法人和装教育国民推進会議の協力による実践<sup>6)</sup>、下野新聞に取り上げられた例<sup>7)</sup>等がある。また、増淵の報告<sup>8)</sup>によれば、総合的な学習の時間に家庭科関連内容を結びつけた例としては、食文化、郷土料理や地域特産物、地域（高齢者、保育）との交流、環境問題等が題材としてあげられているが、衣生活領域についての事例は少なく、和服の着装を含む「和を体感する」内容を扱った実践報告はほとんど見当たらない。

そこで、技術・家庭科と総合的な学習の時間をリンクさせた聾学校での授業実践<sup>9)</sup>、技術・家庭科において、「和」の生活文化を体験する授業<sup>10)</sup>を参考にしながら、家庭科の枠にとどまらない総合的な学習の時間で実践できる内容を模索した。「自国の文化を知ることはさまざまな文化を尊重し世界の人々と共生するための基盤となる」と考え、和服の着用を通してわが国の衣生活文化に触れ、良さを知ることがを意図する授業を試みた。

本研究では、「和を味わう」をテーマに中学校の総合的な学習の時間にゆかたの着装を体験するプログラムを実施し、着装指導については外部講師が説明する「補完型」の授業運営について報告する。あわせて、着装実践の前後に生徒の和服に対する興味・関心、和服に対するイメージ等を調査し、着装に伴う気持ちの変化、イメージの広がり等の分析をもとに、授業の効果について考察する。

## 2. 授業実践について

### 2-1 生徒の実態

本研究では、埼玉大学教育学部附属中学校第2学年の総合的な学習の時間（生活文化講座：1クラス男3名、女26名）において「ゆかたの着装を通して日本文化を知ろう」と題し、50分授業全4回にわたってゆかたの着装体験を含む体験的授業を実施した。選択制の講座のため女子が多く、衣生活に対する興味・関心も全体に高いことが予想される。

事前調査において、女子は全員、男子は1名がゆかたまたはきものの着装経験があると回答し、12名は、きものと記述した。ゆかたの着付けの出来る人については祖母5名、母6名、祖母と母4名であった。クラスの半数が身近にゆかたの着付けの出来る人がいると答えたことになる。10名（35%）の生徒は自分サイズのゆかたを所有していた。

### 2-2 授業内容

授業は2012年7月、2週にわたり2時間続きで2回実施した。本研究は、自国文化の理解の入り口として、「ゆかたを着装する、お茶を味わう、俳句を詠む」を組み込んだ指導案を教師が作成し、着装技能の指導では外部講師の協力を得て授業を構成した。リサイクルきものショップ<sup>11)</sup>から派遣された講師1名が着付けを示範し、大学生アシスタントが着付けの補助に入った。生徒全員が着装した状態で最後の1時間の授業を受けることができるように、ゆかたと帯は一人1枚とし、事前に生徒の人数、性別、身長を調査し、ゆかたのサイズ調整は業者に依頼した。今回、着付けに必要な教材（ゆかた・帯・紐等）は無償で提供をうけた。

毎時間の指導の目標は、

(1) 和服について知ろう (2) ゆかたの帯結び体験を通して和服にふれてみよう

(3) ゆかたの着付け体験を通して和服のよさを味わおう (4) ゆかたを着て和を味わおう  
である。表1に授業内容を示す。

## 2-3 調査項目

1時間目の最初に生徒の実態把握を目的に、和服(きもの・ゆかた)の着装経験の有無(1項目)和服を着た時の気持ち(7項目)ゆかたの着付けの出来る人について(1項目)所有(自分に合ったサイズのゆかた)の有無(1項目)ゆかたへの興味・関心(7項目)について調査し、和服についてのイメージマップの記載をさせた。2時間目には、それまでの授業で触れたゆかたや帯についての感想を自由記述でワークシートに記載させた。さらに、4時間目の着装を終えた時点で、着付けの理解度と授業についての感想に関する質問を行うとともに、ゆかたを着た時の気持ちとゆかたへの興味・関心について再調査した。着付けを体験した感想とゆかたで過ごして感じたことの記載(ワークシート)イメージマップへの追記は記述式とした。

### (1) 和服を着た時の気持ちとゆかたへの興味・関心

和服を着た時の気持ちについては、事前調査ではこれまでの経験を踏まえて「気持ちが高まった」「優雅な気分だった」「うれしかった」「帯がきつかった」「歩きにくかった」「姿勢がよくなった」「身のこなしが変化した」について、5.そう思う 4.ややそう思う 3.どちらでもない 2.あまりそう思わない 1.そう思わない、の5段階からの回答を得た。

ゆかたへの興味・関心では、「着付け」「ゆかたの色・柄」「ゆかたと帯の色の組み合わせ」「帯結びのアレンジ」「ゆかたの流行」「歴史」「TPO(マナー・ルール)」の7項目について、5.興味がある 4.やや興味がある 3.どちらでもない 2.あまり興味はない 1.興味はない、の5段階からの回答を得た。

ゆかた着装実習終了後にも、ゆかたを着た時の気持ちと興味・関心について同様の内容を質問した。

### (2) イメージマップ作成と着装体験に関する感想

イメージマップについては教師が例を示して説明した後、着装実習前に和服(きもの・ゆかた)についてのイメージや知っている言葉を思いっただけ記入させた。さらに、4時間の授業を終えてからそのシートに加筆させて生徒のイメージと知識の広がりを確認した。着装体験に関する感想は、ワークシートには「ゆかたをたたんで分かったこと・感じたこと」「帯を結んで分かったこと・感じたこと」「帯やゆかたに触れて感じたこと」について、ワークシートには「ゆかたの着付けを体験してみて分かったこと・感じたこと」「ゆかたで過ごしてみて感じたこと」について記入させた。

### (3) 着付けの理解度と授業の感想

学習後のアンケートとして、着付けの理解度「腰紐の結び方が理解できた(腰ひも)」「文庫結びの結び方が理解できた(文庫結び)」「(女子)」「貝の口結びが理解できた(貝の口)」「(男子)」「おはしょりがうまくなってきた(おはしょり)」「(女子)」「たたみ方が理解できた(たたみ方)」「一人でも

表1 授業の展開 (1・2時 被服室 3・4時 集会室 2年生女子26名、男子3名)

時間	学習内容	学習活動 教師の働きかけ 評価規準	教材など
1	和服について知る。	<p>事前の質問紙調査とイメージマップの記載 和服について理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 和服の基礎的知識・歴史について知る。</li> <li>2. 日本の伝統色、模様について知る。 ・伝統色・文様・色の名前・季節とのかかわりについて知る。</li> <li>3. 和服と洋服の構成(平面構成と立体構成)を比較し、和服の形の特徴を知る。</li> <li>4. 和服の一種である「ゆかた」について知る。 ・ゆかたのルーツ ・現代の色柄デザイン、ブランド</li> <li>5. ゆかたの構成、男女の違いを知る。</li> </ol> <p>資料を見ながらゆかたをたたむ。 休み時間に体育着に着替えるよう指示する。</p>	<p>プレゼンテーションによるスライドワークシート</p> <p>ゆかた(各班1枚)</p>
2	ゆかたの帯結び体験を行う。	<p>帯結びの方法について知る。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 帯について知る。 ・長さ、幅、表裏、男女の違い</li> <li>2. 帯結びの仕方をプリントをもとに理解する。 ・貝の口、文庫結びの方法</li> <li>3. ゲスト講師2名による帯結びの演示 帯結びを体験する。 ・男子は貝の口、女子は文庫結びをする。</li> </ol> <p>2人で協力して1本目が完成したら次の人が練習する。 帯は前で結び、後ろに回転するよう指示する。 自己評価、相互評価を行う。 ・結んだ帯の評価：良い結び方、そうでない結び方(報告書P83)を知る。 帯結びを通して洋服とは異なる日本文化としての和服のよさに気づく。&lt;関心・意欲・態度&gt; 本時の学習を振り返り、ワークシート に記入する。 次時は体育着に着替えるよう指示する。</p>	<p>半幅帯、角帯</p> <p>講師1名 TA 4名</p> <p>プレゼンテーションによるスライド</p>
3	ゆかたの着付け体験を行う。	<p>着付けの方法を知る。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 着付けの演示(モデルは事前に決めておく) ・ゆかたの着装に必要な小物・手順について知る。 ・ゲスト講師が説明しながら、女子、男子の順に着付けをしてみせる。女子は講師自身、男子は教師がモデルとなる。教師が確認形式をとる。</li> <li>2. 着装の良い例、悪い例の写真を見て参考にする。 着付けの体験をする。 ・男子3人、女子2人でグループとなる。 ・生徒の身長に合うゆかたを配付する。一人が着装したら次の人が着る。 ・コーディネートを考えゆかたに合う帯を決めさせる。女子二人目は造り帯を使用する。</li> </ol> <p>資料を見たり、TAにアドバイスを受たりしながら帯結びを行う。 全員で記念撮影を行うことを知らせ、撮影の隊形を指示する。 次時は正座で着席して待つよう指示し、次時の学習内容を知らせる。</p>	<p>ゆかた・帯・小物セット</p> <p>女物27、男物3枚</p> <p>プレゼンテーションによるスライド</p> <p>講師1名 TA 10名</p>
4	様々な視点から「和」を味わう。	<p>ゆかたを着てお茶を味わう ・正座をしてお茶とお菓子を受け取る。 ・あいさつをしてお茶とお菓子を味わう。</p> <p>ゆかたの良さを俳句で表現する ・短冊型色紙を配布し、筆ペンで書かせる。 ・全員が書き終えたら発表させる。</p> <p>和服に関する4時間分の授業を振り返る。 ・感じたことや考えたことをワークシート に記入する。 和を味わうという体験を通して洋服とは異なる日本文化としての和服のよさに気づく。&lt;関心・意欲・態度&gt; ゆかたのたたみ方を復習し、各自で畳む。その他の用具も全て片づける。</p>	<p>ミドリイ・お茶・ミどら焼き 筆ペン、短冊</p>

ゆかたを着ることができる（着る）」「人にゆかたを着せることができる（着せる）」について、5. そう思う 4. ややそう思う 3. どちらでもない 2. あまりそう思わない 1. そう思わない、の5段階から回答を得た。

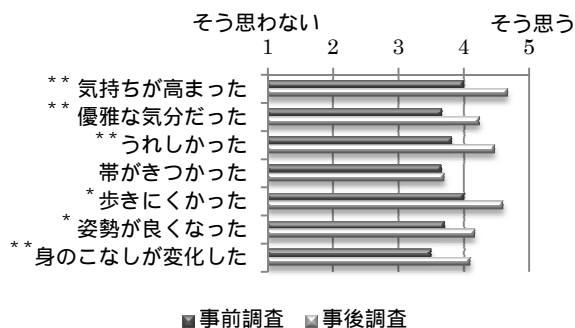
和服への関心と授業の感想「和服に関心もてた」「ゆかたを家で着てみたい」「もっと着付けが練習したい」「楽しかった」「難しかった」についても理解度と同様、5段階の回答を得た。

### 3. 結果と考察

#### 3-1 ゆかたを着た時の気持ちと興味・関心

和服を着た時の気持ち7項目について平均値を図1にまとめた。授業の前後で比較すると体験についての感想は着装直後の方が印象深くより強く感じているのがわかる。着装に対する肯定感（うれしい、気持ちが高まる、姿勢がよくなる等）が高まる一方で、歩きにくさを感じていた。しかし、帯のきつさは授業後も値が変わらず、帯結びが姿勢を良くしたり、姿勢の良さが身のこなしを変化させたりにつながるというプラス面を体感したことが影響していると推察される。

また、興味・関心については全ての項目で、事前調査より事後調査の平均値が高くなっていった（図2）。平成23年度の附属中の実践研究<sup>12)</sup>における同様の設問と比較すると、今回の平均値は「和服を着た時の気持ち」も「ゆかたへの興味・関心」についても事前から高い値を示し、対象者が講座選択制の授業のため衣生活に対する興味・関心も高い傾向が示された。事後にはさらに平均値が高くなり、学習によって達成感や興味・関心の度合いを引き上げることができた。



t検定：有意確率\*\* $p < 0.01$ , \* $p < 0.05$

図1 和服着用の感想

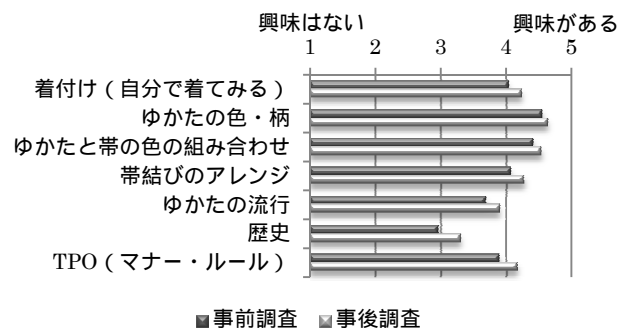


図2 ゆかたへの興味・関心

#### 3-2 着付けの理解度と授業の感想

着装技能の理解度では「文庫結び」で88.9%、「たたみ方」で67.8%の生徒が「ややそう思う」「そう思う」と回答し、多くの生徒が着装技能について理解できたと認識していた（図3）。帯結びはゆかたの着装前時に練習し繰り返し実践したことで理解度が上がったとみなされる。

しかし、「一人でゆかたを着ることができる」については36.7%の生徒が、「人にゆかたを着せることができる」には36.7%の生徒が「ややそう思う」「そう思う」と回答し肯定度は半数を下回った。一度の着付け体験ではゆかたの着装（自分で着ること、人に着せること）に対してあまり自信が持てないようである。

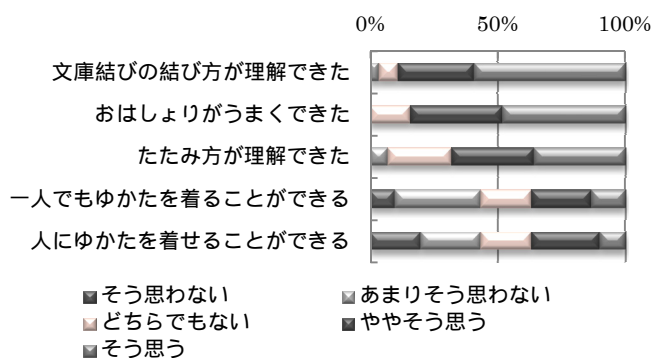


図3 着付けの理解度

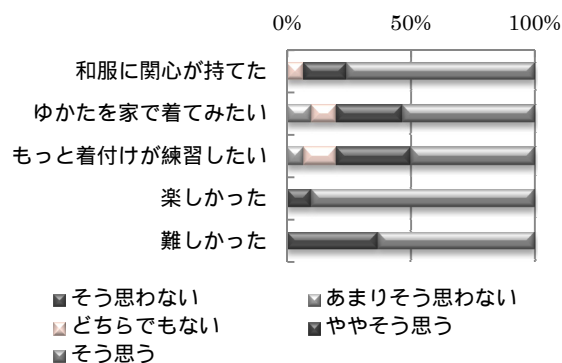


図4 和服への関心と授業への感想

和服への関心と授業への感想については「和服について関心がもてた」で93.1%、「ゆかたを家で着てみたい」で80%、「もっと着付けの練習がしたい」で80%、「楽しかった」「難しかった」では全員が「ややそう思う」「そう思う」と回答していた(図4)。着装の難しい面を実感しながらも楽しいと感じていたことが分かる。生徒の和服に対する興味・関心が高い傾向は3-1でも述べたが、授業後に93.1%が「和服について関心が持てた」、全員が「楽しかった」と回答したのは、4時間の題材の中で、着装にとどまらず、お茶や和菓子を味わい、一句詠むという「和」を体験する活動を取り入れた題材設定の成果といえよう。

#### 4. 自由記述からの分析

##### 4-1 イメージの広がり

和服(きもの・ゆかた)についてのイメージマップは着装実習前に記入し(事前調査)さらに、4時間目の授業を終えてからそのシートに加筆する形式(事後調査)でデータを収集した。事後調査は授業終了後に提出させたことから対象人数が少なくなっているが、それぞれに記入された言葉の総数、一人平均の語数等を表2に示した。イメージ語数は一人5語~28語に分布し、最も頻度の高いのは8語数(6名)で、平均すると13.2語となった。事後調査では1人平均7.6語が書き加えられていた。清田の報告<sup>13)</sup>では学習前のイメージマップに記述された言葉の数の平均は8個とされていたのと比較しても生徒の興味・関心の高さがうかがわれる。表中の関心大グループ、関心小グループは3-1で示した興味・関心(7項目)の値をもとに総平均(3.95)を算出し、興味・関心の個人平均が総平均より大きい場合を関心大グループ、小さい場合を関心小グループと

表2 イメージマップへの記入語数について

	対象人数	イメージ語総数	平均語数	事前		事後	
				関心大	関心小	関心大	関心小
事前調査	29	385	13.2	15.1	10.2		
事後調査	18	137	7.6	8	7.7	6.8	9.6

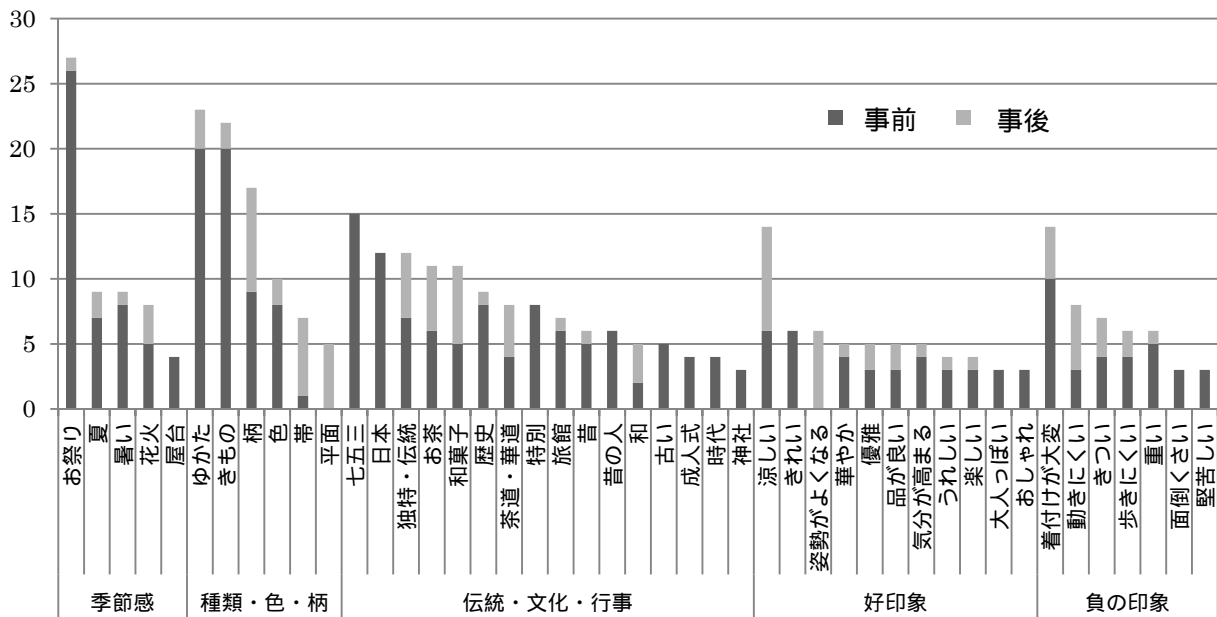


図5 イメージマップ言葉の出現数(事前調査と事後調査の合計)

した。興味・関心が高いグループではイメージマップに書き込まれる言葉の数が多い(15.1語)が、事後調査に関しては興味関心が低いグループとの差は小さい。しかし、事後調査の言葉の数を授業後に調査した興味・関心項目の総平均値をもとに関心が高いグループと低いグループで比較すると、関心が高いグループでは6.8語、低いグループでは9.6語となり平均値が低いグループでよりイメージの広がりが認められた。

また、イメージマップに記述された言葉(事前+事後)について、出現頻度が多い(3回以上)ものを整理すると図5のようになり、「季節感」を表すお祭り・夏、和服の「種類・色・柄」としてゆかた・きもの・柄、「伝統・文化・行事」を表す七五三・日本・伝統・独特、「好印象」としては涼しい・きれい、「負の印象」としては着付けが大変・動きにくい等があがっていた。

さらに、事前・事後それぞれに記述された言葉を項目ごとに分類し、その割合を算出したところ図6のようになった。事後にその割合が増えているのは色柄、構成、日本文化、好印象、着心地に関する言葉であった。

事後に記入されたイメージの特徴としては、和服については柄・帯・平面、伝統・文化についてはお茶・和菓子・俳句、好印象については涼しい・姿勢がよくなる、負の印象では動きにくい等の表現が見受けられ、平面、姿勢がよくなるは事後調査のみに記述されていた。出現頻度は高くなかったがコンパクトになる、サイズの調整が出来る、短歌といった表現もあった。これらは、授業で習得したイメージと考えられ、授業や体験学習のもたらす影響が大きいことを示唆した結果と言えよう。

#### 4-2 着装体験に関する感想

着装体験に関する感想については、自由記述形式をとったので、句点を区切りに1文(1件)とし、長い文章の場合、接続助詞(...が、...ので等)の前後で内容が異なる時には文章を分けた。

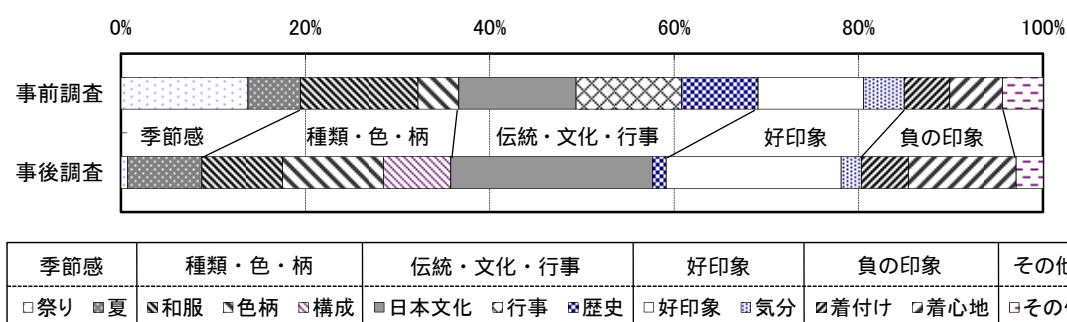


図6 イメージマップ 言葉の出現率 (事前と事後の比較)

さらに、文章に含まれる語句・表現をグルーピングし(例えば、「ゆかたをたたんで分かったこと・感じたこと」では出来ばえと難易度、感想、たたみ方等) これらを肯定的な記述(+)と否定的な記述(-)に分類した。その件数を以下にまとめた(表3)。全体としては、肯定的な記述にはたたむ・帯結び・触れる・体験に関する感想、たたみ方、ゆかたで過ごした時の精神面(高揚感)が多く、例えば、うまくできた、簡単、満足感、楽しいなど、否定的な記述にはたたむ・帯結び・体験の出来ばえと難易度、ゆかたで過ごした時の動作・着付けに関して、例えば、負の印象として難しい、面倒、大変などの表現がみられた。生徒の記述からは、たたみ方を学習することでゆかたの平面構成や収納の利点についての気づき、帯結びを学習することで結び方の種類や帯の幅・厚みの違いへの気づき、実物に触れることによる色・柄の豊富さ、素材の特性等への気づきがうかがえた。

## 5.和を味わう

4時間目は全員が着装した状態で「お茶を味わう」と「俳句を詠む」を実施した。「ゆかたの着付けを体験して分かったこと・感じたこと」「ゆかたで過ごして感じたこと」のワークシートの記

表3 着装体験に対する感想の記述件数

ゆかたをたたんで分かったこと・感じたこと	帯を結んで分かったこと・感じたこと	帯やゆかたに触れて感じたこと	ゆかたの着付けを体験して分かったこと・感じたこと	ゆかたで過ごして感じたこと
合計 56	67	56	90	102
出来と難易度+	出来と難易度+	出来と難易度+	出来と難易度+	動作+
4	2	1	1	19
出来と難易度-	出来と難易度-	出来と難易度-	出来と難易度-	動作-
9	15	1	24	35
感想+	感想+	感想+	感想+	精神面+
9	25	21	33	24
感想-	感想-		感想-	精神面-
3	7		9	6
たたみ方+	結び方	構成	着付け	着付け+
16	17	8	14	3
たたみ方-	帯の構成	色柄素材	色柄	着付け-
1	1	25	9	9
構成・収納				文化
10				6
布地について				
4				



述は全体で 192 件で、1 人当たり 6.4 件となった（表 3）。着付けを体験して着付けや帯結びの難しさを実感する一方、高揚感や印象の変化、「優雅な気分」「大人になったような気分」を楽しむことができたようである。また、ゆかたで過ごす体験を通して、正座や動く・歩くといった動作が制約される窮屈さと同時に所作が整う・姿勢がよくなる等の和服のメリットも感じ取ることができた。生徒が詠んだ俳句にも授業を通して体験したこと、感じたことが素直に表現されていた。

すずしげな ゆかた身につけ「和」を味わう  
ゆかた着て いつもと違う 大人気分  
ゆかた着て こころに咲いた 夏花火  
和をまとい 涼と喜の中 歴史を想う  
きつくて 気分上々 新体験



写真1 お茶を味わう

## 6. 授業実践を終えて

### 6-1 教師の感想

授業の進行や指示等は教師が、その流れの中で着装に関する示範は外部講師が行うというように役割を分担したが、反省点として事前打ち合わせをする時間が確保できなかったことが挙げられる。教師の意図や示範のタイミング、生徒の実態等を事前に外部講師に伝えておくことでよりスムーズに授業が展開できると考えられる。今回は 30 人の実践であったが、講師や学生アシスタントの協力があってこそ、時間内に着装することができた。全員に着装体験をさせたいという思いからこのような形をとったが、生徒の人数や実態、教室形態に応じて形式を変えることが必要である。公立中学校では、ゆかたや小物の購入・保管は難しいので、ゆかた等を確保できるレンタルシステムの利用価値は高いと考える。

総合的な時間の学習であり、技術・家庭科のねらいとは異なる内容と流れをどう組み立てるかが難しい問題であった。1 時間目は、日本文化に触れる機会が少ないという実態を踏まえ、写真等を活用し、衣服以外の視点を含めて「和」の良さを生徒に伝え、生徒の興味・関心を引きつけるように試みた。2・3 時間目は生徒に体験させたい思いで帯結びと着装を取り入れた。4 時間目には、「ゆかたを着る」に加えて、「お茶や和菓子を味わい、一句詠む」という体験を取り入れた。生徒はどの活動にも意欲的で楽しそうだったので一番の成果であった。和服を着るのは難しい面倒であるというネガティブな印象で終えるのではなく、楽しみながら味わうことで、和服のよさひいては日本文化のよさを改めて実感させることができたと感じている。

### 6-2 外部講師の感想

2 時間の家庭科の授業では、着付けで手一杯なことが多いが、今回、生徒たちは 4 時間で「歴史」から「着用」して「和文化を味わう」までを体験し、より記憶に残る和文化を体感できたと思う。帯結びは、文庫（女子）、貝の口（男子）、着付け全般が、資料及び DVD<sup>3)</sup> でやり方が指定されていたため、準備がしやすかった。e-learning の資料（先行研究<sup>3)</sup> にて作成）も整備されて

いるので、生徒の振り返り学習にも役立つと思った。

今回は、学生アシスタントが大勢いたので生徒に目が届き、短時間で着付けを行うことができた。生徒の理解がとても早く、驚いた。ペアになり交替で着付けたので、お互いに直し合ったり考えたりしながら練習ができていた。着用後は男女ともうれしそうに笑顔になっていたのが印象的であった。今後、ゆかたレンタルに講師派遣を組み込んで、和服の普及に尽力していきたい。



写真2 ゆかたの着装実習

外部講師に依頼する場合、指導上の課題、授業をコーディネーターすることの負担感、レンタル費用など検討すべき点はあるが、教師も講師も生徒たちの高揚感、達成感を感じていた。また、ゆかたの着装から日本文化に対する興味・関心へとイメージの広がりを確認することができ、着装を含め「和」の体感を重視したことが、歴史や文化への興味・関心を高めることにつながり、総合的な学習の時間の目標である自国文化の理解への入り口として、十分効果があったと考える。

## 7.まとめ

総合的な学習の時間に衣生活や衣生活文化の内容を結びつけた取り組みは少なく、和服の着装を含む「和を体感する」内容を扱った実践報告はほとんど見当たらない。そこで、多くの学校で導入できる授業実践を目指して、きものの準備と着付けの指導対策として外部講師の協力を得ながら、ゆかたを長く身につけ「和を味わう」をテーマにその良さを体感させる題材を設定した。

着装実践の前後に生徒の和服に対する興味・関心、和服に対するイメージ等について調査し、着装に伴う気持ちの変化、イメージの広がり等の分析をもとに、授業の効果について考察した。

(1)和服を着た時の気持ちや和服に対する興味・関心が授業後により高まったのは、着装にとどまらず、和を体感するという視点を重視した活動を取り入れた題材設定の成果といえよう。多くの生徒が着装技能について理解できたと認識していたが、一度の着付け体験では自分で着ること、人に着せることに対してあまり自信が持てないようであった。授業に対する感想や和服に対する関心等については、着装の難しい面を実感しながらも楽しいと感じていた。

(2)和服のイメージマップには、事前に1人平均13.2語、事後には平均7.6語が書き加えられていた。事後に記入された言葉には、授業で学習した内容が盛り込まれた。着装体験に対する生徒の記述からは、ゆかたの平面構成や収納の利点、帯の結び方の種類や幅・厚みの違い、実物に触れることで色・柄の豊富さ、素材の特性等にも気づいたことが認められた。着付け体験やゆかたで過ごした感想の記述は1人当たり6.4件で、着付けや帯結びの難しさを実感する一方、高揚感や印象の変化、「優雅な気分」「大人になったような気分」を楽しみ、動く・歩くといった動作が制約される窮屈さと同時に所作が整う・姿勢がよくなる等の和服のメリットも感じ取っていた。

(3)ゆかたの着装実習には、ゆかた・小物の準備、着装指導等多くの課題があったが、ゆかたの

準備の業者への依頼と外部講師の授業補助は教師の負担を軽減し、より広範な内容の授業を構成するための対策の一つとして有効であった。今回の実践は、講師等の協力によって短時間で生徒全員の着装が可能となり、ゆかたの着装を通した「和」の体験学習によって日本文化に触れ自国の文化の理解へとつなげる総合的な学習の時間のプログラムとして位置づけることができた。

#### 謝辞

本研究の参考にさせて頂いた先行研究の共同研究メンバー、大妻女子大学名誉教授呑山委佐子先生、横浜国立大学教授堀内かおる先生、講師派遣及び教材（ゆかた・帯等）を提供頂きました（株）東京山喜たんす屋 和装教育支援担当 中村光宏様、曾根珠美様に心より感謝致します。

#### 引用文献

- 1) 教育基本法 [www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/houan.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm)
- 2) 文部科学省 例えば、中学校学習指導要領解説 音楽、体育など
- 3) 薩本弥生、川端博子、堀内かおる、扇澤美千子、斎藤秀子、呑山委佐子 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発 「きもの」の着装を含む体験的学習と海外への発信-文化ファッション研究機構・服飾拠点共同研究（2014） <http://kimono-bunka.ynu.ac.jp/>
- 4) 文部科学省 国際理解教育実践事例集 中学校・高等学校編（2008）p.132
- 5) たとえば、藤川大祐、塩田真吾、石川清香 中学校理科における外部講師を招いた授業の試み（2009）千葉大学教育学部研究紀要 57 p.87～92
- 6) NPO 法人和装教育国民推進会議 <http://wasoukyouiku.jp/>
- 7) 下野新聞 「ゆかたの着付けに挑戦 文星付中で和装教育推進団体指導」2012.07.06 記載
- 8) 増淵哲子 中学校家庭科と「総合的な学習の時間」の関連について 全道中学校家庭科担当教員調査から（2007）北海道教育大学紀要（教育科学編）58（1）p.127～140
- 9) 有友愛子 ゆかたの着装を通して日本文化にふれる取り組み -総合的な学習の時間と関連づけた学習として-（2012）聴覚障害 聾教育研究会 67（5）p.29～33
- 10) 堀内かおる他 「和」の生活文化を体験する家庭分野の授業実践日本家庭科教育学会第54回大会研究発表要旨集（2011）p.16～17
- 11) (株)東京山喜たんす屋 和装教育支援 <http://tansuya.jp/>
- 12) 小林由美他 ゆかたの着装を題材とした教育プログラムの提案 日本家庭科教育学会第55回大会研究発表要旨集（2012）p.34～35
- 13) 清田礼子 家庭科における伝統や文化を尊重する態度を育てる効果的な授業の在り方 日本の伝統的な和服のよさについて学ぶ学習を通して 平成22年山梨県総合教育センター p.7 <http://www.ypec.ed.jp/center/kenkyukaihatu/22/kiyou/h22kiyoucd/22kiyoupdf/kiyota.pdf#search=>

(2012年11月12日提出)

(2013年1月11日受理)

# **The Analysis of the General Learning Classes Involving Wearing of Yukata**

**OUGIZAWA, Michiko**

College of Life Science, Ibaraki Christian University

**KAWABATA, Hioroko**

Faculty of Education, Saitama University

**KATO, Jyunko**

The Junior High school affiliated to the faculty of education, Saitama University

**SATSUMOTO, Yayoi**

Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University

**SAITOH, Hideko**

Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University

## **Abstract**

In this study, we carried out a wearing of Yukata learning experience in the general learning classes at a junior high school. We analyzed the effects of learning "a taste of Japanese" involving wearing of Yukata.

Although there were many tasks to solve before conducting the class, such as preparing the Yukata and arranging instructions for the wearing of Yukata, the visiting lecturer's participation was effective in decreasing the teacher's burden and time consumption, and helped constitute a more extensive lesson.

It can be concluded that our efforts to incorporate activities that focused not only on the wearing of Yukata but also on "a taste of Japanese" experience led to the enhancement of interest towards kimono and feelings for wearing a kimono after the lesson.

Through the experience of Yukata dressing, while they found it difficult to dress and knot the bows, the students seemed to have enjoyed the feelings of elation and the change of impression, and also felt that the restricted tightness of the Kimono in moving and walking brought about such benefits as elegant gestures and better postures.

We think this study was also effective in carrying on the tradition of kimono culture to the future.

**Key Words:** Wearing of Yukata, The general learning classes, Visiting lecturer, Japanese culture